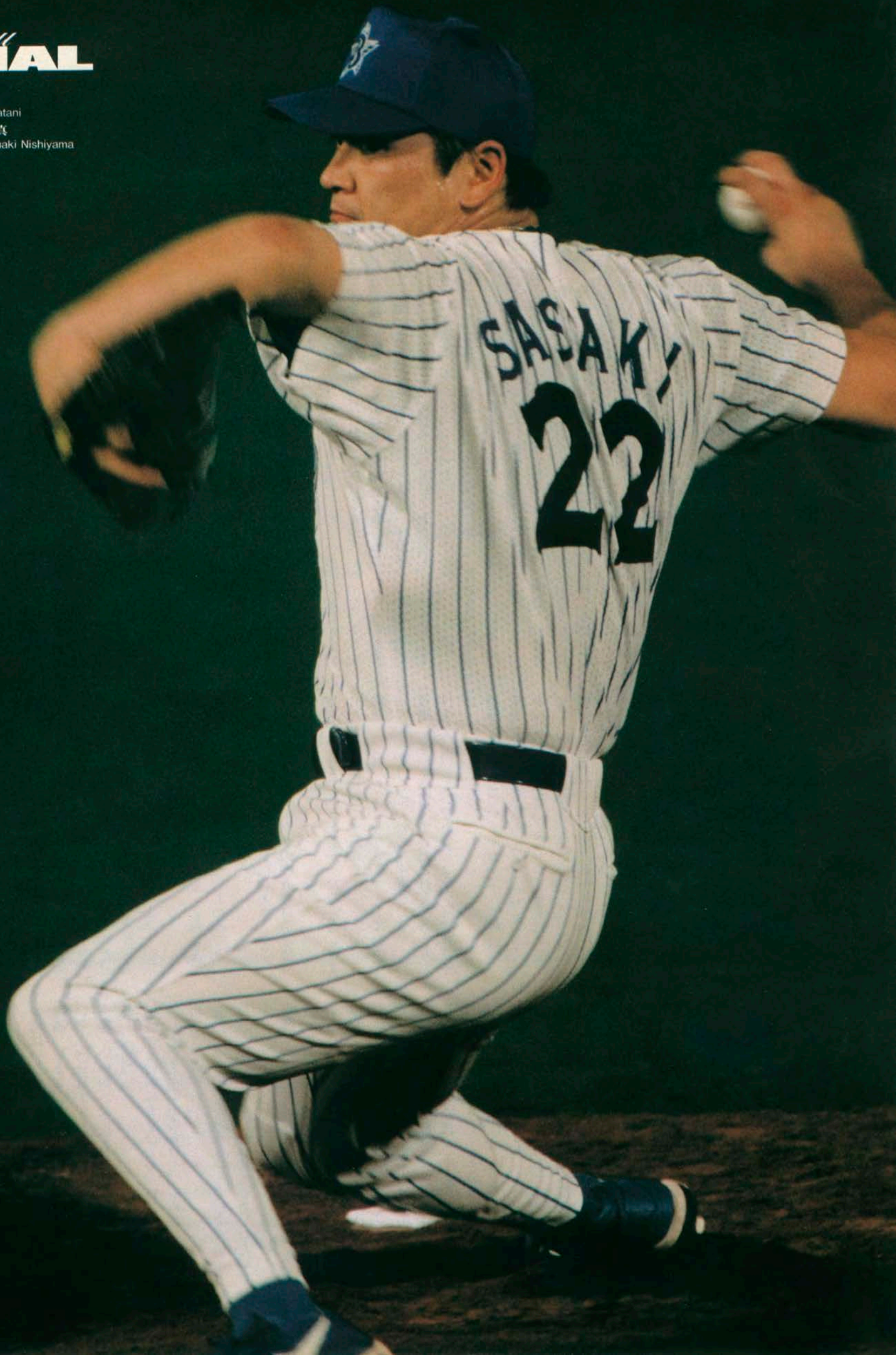


Baseball
FINAL
1998

永谷脩一
text by Osamu Nagatani

西山和明 写真
photograph by Kazuaki Nishiyama



佐々木

主浩

【MVPインタビュー】

「これで当分、ボールを握らなくていいのかと思うと、ホッとしました。今夜は何もかも忘れて思いっきり騒ぐぞ〜」

日本シリーズ第6戦、西武・金村義明の打球が二塁ゴロの併殺になり、日本一になった佐々木主浩。緊迫した場面での登場が少なかつたこのシリーズで、初めて抑えの仕事らしい仕事が出来た試合だった。

「リーグ優勝のときはあれこれ考えたけれど、シリーズではそんな余裕はなかった。早いカウントで打って助かった」と、9回の場面を振り返る。一方の金村は「追い込まれたらフォークがあるから、早いカウントで打ちにくいしかなかった」と言う。

「日本シリーズでは体調が良くなかったし、雨と寒さの影響もあって、コンディションが難しかった。一つのチームと毎日対戦するわけだけど、流れが右に行ったり、左に行ったりするので、気が抜けなかった。第6戦の最終回で大塚光二に三塁打を打たれたとき、これでもう一点も与えられないと思う前に、大学時代のことを考えていた。アイツにはずいぶん助けられたなって。東北福祉大で同級生のアイツには、僕が野球部の合宿を抜け出したたり、逃げ出したりしたときに、いつも助けてもらっていた。日本一のマウンドに立っているのに、なぜかそんなことが思い出されたんです。憎らしい敵役じゃなくて、一緒にここまで戦い抜いてきた戦友という感じがしていたのかも知れません。フィールドスチオイスで走者が溜まったときでも、特別な緊張感はなかった。ここで負けてももう一試合できるという余裕だったのかな。むしろリーグ優勝のほうが緊張した。でもこれで日本一に

「頂点をかみしめる。」

完璧と言えるシーズンだった。幾多の記録やタイトルを手にした。今季の最優秀選手にも輝いた。でもそれらは優勝してこそのものであった。この「日本一」の喜びにはかなわなかった。ストッパーとしての自分の存在価値は、ここにあるんだと肌で感じていた。無敵と言われた男・佐々木主浩が、シーズンから日本シリーズまで、どう投げ、どう闘ったのかを追った。

なってなければ、また違ったでしょうね。勢いに乗ってここまで来てしまっただけで、本当に強いチームだと思えました。時間がたつて、皆から「日本一おめでとう」と言われて、自分たちは大変なことをやってしまったんだという実感がわきました」

通算最多セーブ210、通算最多セーブポイント249、年間最多セーブ45、年間最多セーブポイント46、連続試合セーブ22……。今シーズン記録尽くしで最優秀選手賞を手にした男が、生涯記録に残らない場所で純粹にチームの勝利のために投げた。

「今シーズン、優勝と200セーブが目標のうちの一つでした。200セーブを達成できれば、優勝できると思ってましたから。東尾さんだったと思うんですけど、200勝を挙げてからは個人の記録よりも、チームの勝利

Kazuhiro Sasaki

のために純粹に投げられると話をしていたのを聞いたことがありません。僕の場合も200セーブを越えてから本当にそう思えるようになります。

個人記録など、優勝の前にはちっぽけなものだっただけ。それに優勝を経験して、日本一の感激を味わって、これで本物のストッパーになれたと思いました」

優勝の味を知らない男が真のストッパーと言えるのか、との先輩投手の言葉にこだわりを持ち続けた男が、夢にまで見た日本一。そして家族とともに「ビールかけ」で日本一の宴を味わった。

「大の大人があれだけハシヤけるんですから、やっぱり優勝っていいものですよ。娘や嫁さんには子供みたいと言われたけど。でも優勝して本当によかった。今季あったことがすべていい思い出になっちゃったんですから」

リーグ優勝の後にも、大騒ぎした。しかし、それまでのシーズンの疲れが優勝による気の緩みで一気にでてしまい、発熱をともなうカゼをひいてしまった。結局日本シリーズ3日前から全くピッチングをせず、体調も悪いまま、ぶっつけ本番でシリーズを迎える。

「本当のことを言うと、とても投げられる状態じゃなかった。なにせ3日間投げてないんですから。権藤さんが、そんな状態でブルペンで投げるなら、マウンドで投げて調整しろと言って、第1戦の楽な場面で登場させてくれた。盗塁はやって来るならやってみろって感じで、谷繁にも思い切った刺してくれと言っておいた。僕にも考えがあったから」

今年の7月、巨人戦のこと。一塁走者・松井秀喜が打者・清原和博のとき盗塁に失敗し、

ゲームセットとなったことがあった。佐々木のセットのときのフォームの大きさに加えて、落差の大きなフォークのために、キャッチャーは盗塁を阻止しにくい。それを知っている各チームは盗塁を試みて、佐々木に揺さぶりをかけてくる。巨人・松井の場面では、「走ってくるのがわかってたからクイックで投げた」と言っていた。その術中にまんまとはまったわけだが、佐々木はその作戦を日本シリーズでも使った。

シリーズ前から、西武ベンチは「佐々木のフォークの握りはわかる。そのときに盗塁すれば成功率は高い」と判断していた。三塁コーチの伊原春樹は球種を見破る名人だ。第1戦、打者・高木浩之の2球目、佐々木の握りはフォーク。ここだと思つてサインを出した伊原コーチだったが、投げた球は141kmのストレートだった。谷繁は三塁・進藤達哉に素早く送球し、盗塁を試みた二塁走者の高木大成はタッチアウトとなつてしまったのだ。

谷繁は「佐々木さんは走ったら思いっきり投げてくれ」と言っていたから、走つてくることを知つていてストレートを投げたんだと思うんですよ」と解説したが、ストライクが入らない、病み上がりの佐々木が仕掛けたワナに名ベースコーチもはまり、西武の反撃の糸口は断ち切られてしまった。

「調子がいいとか悪いとかじゃない。高い年俵をもらっている以上、どんな状態でも抑えなければいけない。ボールが走っていないければ、別の部分でカバーすればいいし、ボールが走っているなら余計なことを考えず、打てるものなら打つてみる」という気持ちで投げています。いいとか悪いとか言つてられない

Kazuhiro Sasaki

調子がいいとか、悪いとかじゃない。高い年俵をもらっている以上、どんな状態でも抑えなきゃいけない。ボールが走ってなければ、他の部分でカバーすればいいし、キレていたら余計なことを考えず、「打てるなら打ってみる」と投げるだけ。

場面ばかりですからね」

今シーズンを通じて佐々木を支えてきたものは何だったのか。個人の記録ではないだろう。優勝したいという気持ちだけなのか。

「昨年は、サイパンの事件で色々言われたり書かれたりしたことに、自分の腕で見返したいという気持ちも強かったし、父親の死というのもエネルギーになった。ただ今年は数字にこだわってみたいと思っていました。昨年は「防御率0点台」なんてあまいな目標を言ったけど、今年は防御率0・00。1点もやらない。昨年は3本打たれた本塁打も、1本も打たせない。無敗にしたい。とにかく全てゼロという目標にした。それを達成できれば、優勝も転がり込んでくると思っていましたから」

その「ゼロ」が、佐々木の気持ちの張りになっていったようだ。昨年8月16日以来続いている無失点記録に、佐々木の体調管理をすべて受け持っている大谷幸弘トレーニングコーチは「打たれて楽になったら？」と声をかけたが、ムキになって「冗談じゃない」と否定していた。だが無敗記録が途切れる日がきた。7月7日、父親・忠雄さんの命日に、東北福祉大の後輩である阪神・矢野輝弘に打たれ、敗戦投手になった。「神様」として祭り上げられてきた男は、因縁に弱いという伝説ができってしまったが、それ以降も精神的に切れなかったのは、佐々木の佐々木たる所以である。

権藤監督は「ありや、別格です」と言って、本人に移動や練習の管理まで任せている。シリーズ第5戦の移動日、練習が免除になったはずの佐々木が、横浜スタジアムにやって来た。その理由は「みんなが練習しているから」だった。そんな佐々木を見た権藤監督が「アイツは大人になったよ」とつぶやいた。

「シーズン中、一番苦しかったのは、7月上旬頃だったかな。負け投手になったときは親父が「打たれて楽になれよ」と言ってくれたんだと思うけど、精神的にも肉体的にもしんどかった。後半戦はそんなことを言ったら

れなかったし、「優勝するんだ」と思って投げたから、体の疲れは精神力でカバーできたと思う。前半戦、何度か打たれたり走られたことで、こっちは工夫できたから、それはそれでプラスだった。ただ1本塁打(中日・大西崇之)だけは余分だったと思う。後半戦、技術的に特に変わったことはなかったのに、あれだけやれたというのは、ファンの後押しによるものだと思う。すごかったもの」

そう言う佐々木は、マジック3からヤクルトに3連敗したとき、初体験の「産みの苦しみ」を味わったのではないだろうか。そのときブルペンで何を考えていたのか。

「最初のうちは「今日ダメなら明日行こうぜ」と考えていた。そのうちだんだん金縛りみたいになってきて、「このまま勝てなくなるかも」って。それだったら、毎試合先制点を取られていたので「オレ、先発で行くぞ」なんて言っていたけど、それもシヤレにならなくなってきたら、胸上げはもう横浜じゃなくても、敵地でも移動日でもいいから、早く決めて重苦しさから逃れたいって思いました。でもせめて日本一の胸上げが横浜でできてホッとしています。応援してくれた人たちに恩返しできたって感じです。今年一番感じたのは、自分ひとりの力だけでは勝てないってことですかね。あの応援の力はすごいですよ」

権藤監督は、「優勝したら大リーグに行かせてやる」と開幕前、佐々木に言った。38年間優勝がなかったのに、連覇したいなんて欲をかいてはダメだから、という気持ちからだったのだが、すべて終わって権藤監督が言った言葉は「優勝ってこんなにいいものなら、来年もやりたくなかった」だった。そうなる連覇に必要な男を手放すわけにはいかない。

「横浜の中で育って、横浜でこれだけいい思いをした。なんかもう「横浜のもの」っていう感じになってきた。だから自分一人の欲とか、希望だけではないにもできなくなりました。佐々木は優勝によって、さらにひと回り大きくなっていった。」